

Public History, Vol. 1, 2004, pp. 57-73  
The Memories of the Napoleonic Wars and St. Paul's Cathedral as 'British Pantheon'  
Takeshi NAKAMURA

## ナポレオン戦争の記憶とセント・ポール大聖堂

中村武司

はじめに

現在、われわれが目にするセント・ポール大聖堂は、1666年のロンドン大火ののちに、建築家サー・クリストファ・レンの手によって18世紀初めに再建されたものである。ゴシック様式の大聖堂を見慣れた当時の人びとにすれば、聖堂中央部に壮大なドームをいただくというレンの設計はきわめて特異なものであったし、現在にいたるまで、イギリスでは他に例を見ない。しかし、その外観ばかりが人びとの目を引くわけではない。再建から3世紀近くを経た現在では、大聖堂に多くのモニュメント<sup>(1)</sup>があることに訪れる人びとは気づく。それは聖堂のドーム内部だけではなく、地下祭室にも数多く置かれているが、そのなかでひととき目立つのが、日本でもよく知られたイギリスの2人の英雄の墓棺である。トラファルガル海戦で戦死した提督ホレイショ・ネルソンと、ワーテルローの勝者であるウェリントン公という、ナポレオンに立ちむかった英雄たちがここに埋葬されたのだ。かれらの葬儀は、イギリスの勝利と栄光を誇示する軍事セレモニーとして大聖堂で大々的に挙行された。しかし、なぜセント・ポール大聖堂でかれらの葬儀が行われたのか、なぜ大聖堂に葬られたかについては、あまり知られてはいない。また、モニュメントの大半が陸海軍の英雄を顕彰するために建立されたものだが、このことにセント・ポール大聖堂に一度でも訪れたことのある方は気づかれただろうか。もう一言つけ加えると、再建されてから18世紀の終わり頃まで、セント・ポール大聖堂には、英雄たちのモニュメントがまったく存在しなかったのである。

これに関して、【図1】のグラフを参照されたい。これはR. ガニス<sup>(2)</sup>の『イギリス彫刻家事典』に記載されたウェストミンスター・アビィとセント・ポール大聖堂のモニュメントを算出し

---

(欧文献の出版地は、とくに記さない場合はすべてロンドンである。)

(1) 彫像、プレート、タブレット、記念墓碑など、さまざまな様式があるが、本稿では「モニュメント」と総称しておく。

(2) R. Gunnis, *Dictionary of British sculptors, 1660-1851*, 1968.

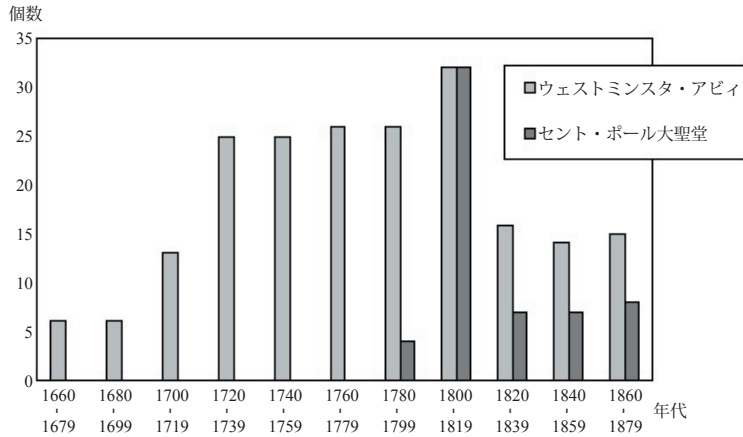


図1 ウェストミンスター・アビーとセント・ポール大聖堂のモニュメント 1660-1880年

グラフ化したものである。このグラフはすべてのモニュメントを数えたものではないし、埋葬者たちの墓に設けられた記念墓モニュメントなども含めていくと、その数はさらに増えることになる。しかし、再建後のセント・ポール大聖堂に関して言えば、18世紀末まで大聖堂のドーム内部にモニュメントが建立されなかったことは、たしかである<sup>(3)</sup>。

イギリスの英雄や偉人たちのモニュメントが数多く建立され、かれらが埋葬されたことから、セント・ポール大聖堂とウェストミンスター・アビーは、いずれも「イギリスのパンテオン」と呼ぶにふさわしい建築であると言えよう。ただし、ウェストミンスター・アビーは、中世以来数多くのモニュメントが建立された「イギリスのパンテオン」であるが、セント・ポール大聖堂は、18世紀末から19世紀初頭にかけて、つまりフランス革命とナポレオン戦争の時代（1789－1815年）に成立した「イギリスのパンテオン」なのである。それではなぜ、ウェストミンスター・アビーとは別に、もうひとつの「イギリスのパンテオン」をこの時代につくらなければならなかったのだろうか。

本稿では、セント・ポール大聖堂へのモニュメント建立をはじめとするコメモレイション（記念・顕彰行為）の考察を通じて、セント・ポール大聖堂が「イギリスのパンテオン」へと再構築される過程をたどりたい。さらに、その過程を対仏戦争とイギリスの国民統合との関連に位置づけ、検討していくことをねらいとしている。

ところで、日本の西洋史研究では、モニュメントや記念行事などを研究対象とした記憶の歴史学が近年関心を集めている。モニュメントに関して言えば、日本のイギリス史研究において

(3) 再建後のセント・ポール大聖堂に建立された最初のモニュメントとは、ジョン・ハワードとサミュエル・ジョンソンの2体である。前者のものは1795年に、後者のものは1796年に完成した。ともにロイヤル・アカデミー会員の彫刻家、ジョン・ベイコンによって制作された。

も、宗教改革後の聖堂の記念墓モニュメントを扱った指昭博の論考<sup>(4)</sup>や、19世紀から20世紀の世紀転換期のロンドンの銅像とその機能、受容のあり様を考察した光永雅明の論考<sup>(5)</sup>がある。しかし、17世紀後半から19世紀前半にかけての「長い18世紀」を対象とした研究は、まだなされていない。欧米ではもっぱら美術史や彫刻史の分野で研究が行われており<sup>(6)</sup>、歴史学においては、死に対する人びとの心性を考察するさいに、その題材として取りあげられる程度にすぎない<sup>(7)</sup>。しかし、リンダ・コリーが言うように、「長い18世紀」の対仏戦争のさなかイギリスの国民統合が進展したのであれば<sup>(8)</sup>、この時代のコメモレイションは国民意識を考察するにあたりきわめて重要な意味を持つ。さらに、セント・ポール大聖堂というもうひとつの「イギリスのパンテオン」の成立は、考察のための重要な手がかりとなるだろう。

本論に入るにあたって最初に確認しておかねばならないのは、かつては唯一の「イギリスのパンテオン」であったウェストミンスター・アビイの性格である。ウェストミンスター・アビイは歴代イングランド国王の墓所であり、中世後期以来、イギリスの宗教建築では最も多くモニュメントが建立されてきた。18世紀の終わり頃には、建立されたモニュメントや埋葬者の数が数百に達していたので、アビイには「墓」、「彫像の倉庫」という別称が与えられていた。そのなかには陸海軍士官のモニュメントも多く含まれるが、庶民院の審議を経て建立されたものはわずか3体にすぎない<sup>(9)</sup>。それ以外は、すべて士官の遺族や友人、東インド会社などが建立したものである<sup>(10)</sup>。この点、後述するセント・ポール大聖堂のモニュメントとはきわめて対照的である。こうしたモニュメントは、故人の追悼のためというよりも、家門の威信や特定の社会集団の愛国心を表象するためのものであった。さらに故人の記憶とは、家門や集団にのみ共有さ

(4) 指昭博「モニュメントと宗教改革——聖堂の世俗化の一側面」『非日常空間の発見』（神戸市外国語大学・外国語研究 35）1995年、73-98頁。

(5) 光永雅明「銅像の貧困——19-20世紀転換期ロンドンにおける銅像の設立と受容」阿部安成・小関隆他編『記憶のかたち コメモレイションの文化史』柏書房、1999年、81-118頁。

(6) M. Whinney, *Sculpture in Britain, 1530 to 1830*, Harmondsworth, 1964; A. Yarrington, *The Commemoration of the Hero 1800-1864: Monuments to the British Victors of the Napoleonic Wars*, 1988. ヤリントンの著作は、ナポレオン戦争と戦後のイギリスのモニュメントを包括的に考察した重要な研究であるが、モニュメントの様式やパトロネジのあり方に焦点があてられており、モニュメント建立の政治的背景やその受容に関しては考察されていない。

(7) たとえば、J. Whaley (ed.), *Mirrors of Mortality: Studies in the Social History of Death*, 1981. また、日本においても人文諸科学の学際的な試みとして、江川温・中村生雄編『死の文化誌：心性・習俗・社会』昭和堂、2002年がある。

(8) L. Colley, *Britons: Forging the Nation 1707-1837*, 1992 (川北稔監訳『イギリス国民の誕生』名古屋大学出版会、2000年)。

(9) その3体とは、海軍大佐ジェイムズ・コーンウォール（1747年）、陸軍少将ジェイムズ・ウルフ（1759年）、ウィリアム・ブレア、ウィリアム・ベイン、ロバート・マナーズの3名の海軍大佐（1782年）である。1792年以前に庶民院でモニュメント建立が決議された事例は、チャタム伯ウィリアム・ピット（1778年）も含めてわずか4件しか確認できない。

(10) たとえば、海軍少将チャールズ・ワトソンのモニュメント（1757年）は、東インド会社が建立したものである。M. Lincoln, *Representing the Royal Navy: British Sea Power, 1750-1815*, Aldershot, 2002, p.96を参照。

れる記憶にすぎなかった。その意味でウェストミンスター・アビィは、家門や集団のさまざまな記憶が競合する場であったと言えよう。また、クロムウェルの護国卿時代以降、軍人の葬儀がウェストミンスター・アビィで行われるようになった。国王の形式を模倣して、クロムウェル配下の提督や将軍の葬儀が執り行われ、テューダ朝、ステュアート朝の国王の墓所であったヘンリー7世礼拝堂に埋葬されたのである<sup>(11)</sup>。その後も、アルベマール公ジョージ・マンク（1670年）、サニッジ伯エドワード・モンタギュ（1672年）、マールバラ公ジョン・チャーチル（1722年）の葬儀が、紋章院の主宰のもと、大規模かつ荘厳に挙行された<sup>(12)</sup>。本稿では陸海軍の英雄の葬儀のような儀礼も考察の対象とするが、それはセント・ポール大聖堂が「イギリスのパンテオン」へと再構築される過程において、決定的な意味を持っていたからである。

## 1 反革命戦争のプロパガンダ

フランス革命・ナポレオン戦争時代に、セント・ポール大聖堂が「イギリスのパンテオン」へと再構築されていくなかで、イギリス政府によるモニュメント建立は重要な意味を持っている。それは、モニュメント建立を求める奉答文（Address）が庶民院で可決されたのち、制作にあたっては国税収入の使用を認められたものだが、1793年から1823年までの30年間に、政府は継続的に陸海軍の英雄や政治家のモニュメントをウェストミンスター・アビィとセント・ポール大聖堂へ建立し続けた。その数はあわせて37体にのぼるが、うち33体がセント・ポール大聖堂に配置されており、すべて陸海軍士官を顕彰するためのものであった<sup>(13)</sup>。

セント・ポール大聖堂への陸海軍士官のモニュメント建立が、庶民院ではじめて決議されたのは、1793年6月のことである。それはロンドン市長であるサー・ワトキン・ルイスの提案によるもので、アメリカ独立戦争の英雄、ジョージ・ブリッジズ・ロドニ提督【図2】と、ヒースフィールド男爵ジョージ・オーガスタス・エリオット将軍の功績を讃えるためのものであった。この提案は審議にかけられ、満場一致で可決された<sup>(14)</sup>。

ロドニ、ヒースフィールドの功績は、イギリスが敗北したアメリカ独立戦争における数少ない軍事的栄光と見なされていた。かれらのモニュメントは、独立戦争末期におけるイギリス

---

(11) 3人のジェネラル・アット・シー、ブレイク、ディーン、ポパムがウェストミンスター・アビィに埋葬された。またクロムウェル自身も同様に埋葬されたが、かれらの遺体は王政復古の直後にすべてウェストミンスター・アビィから取り除かれた。国王葬儀に関しては、指昭博「近世イングランドの国王葬儀——エリザベス1世の葬列を中心に——」江川・中村、前掲書、145-166頁を参照。

(12) C. Gittings, *Death, Burial and the Individual in Early Modern England*, 1984, pp.231-234. ただし、マールバラ公の遺体は、のちにウェストミンスター・アビィからオクスフォードシアのプレナムへと移葬された。

(13) Accounts and Papers (*British Parliamentary Papers*, 1837-38[116] XXXVI, p.471); Reports from the Select Committee appointed to inquire into the present state of the National Monuments and Works of Art; with the Minutes of Evidence and Appendix (*British Parliamentary Papers*, 1841[416] VI, p.437); Accounts and Papers (*British Parliamentary Papers*, 1842[559] XXVI, p.505).

(14) *The Parliamentary Register, or; History of the proceedings and debates of the Houses of Lords and Commons* (以下、*The Parliamentary Register* と省略), Vol. 35, House of Commons, p. 652, 13 June 1793.

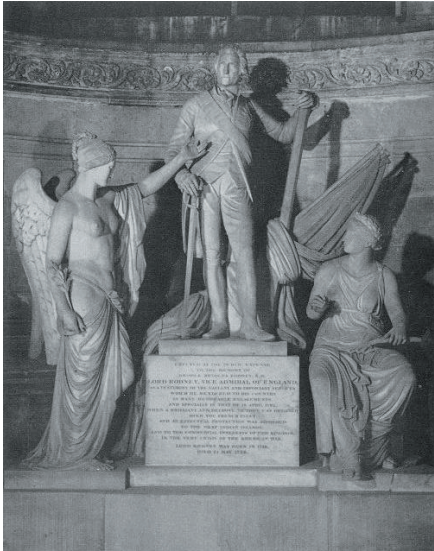


図2  
ジョン・チャールズ・フェリックス・ロッシ（1762-1839）  
海軍大将ジョージ・ブリッジズ・ロドニ卿のモニュメント  
セント・ポール大聖堂

の勝利や軍事的栄光の記憶を喚起し、同時にイギリスの敗北感をうすめることもねらいとしていた。さらに、1793年2月にイギリスは、フランスに宣戦布告をして大陸ヨーロッパへの軍事介入を開始し、フランス領西インド諸島への遠征も始めたが、こうした軍事行動もロドニとヒースフィールドの勝利のように、軍事的な栄光をイギリス国民にもたらすという期待感を高めるためのものであったと言える。

しかし、革命フランスへのイギリスの軍事介入は、1794年6月までの時点ではそのほとんどが不成功に終わった。ヨーク公指揮下のイギリス陸軍のフランドル派兵、ブルターニュの王党派の支援、提督フッドによるトゥーロン攻撃などは、敗北とは言えないまでも、フランスの国民軍を前にして苦戦し、一進一退を繰り返していた。そうしたなか、1794年の「栄光の6月1日」

海戦における提督リチャード・ハウの勝利は、状況を一変させた。この勝利は、フランス革命政府との戦争におけるイギリスの最初の大勝利であり、1692年5月のラ・オーグ海戦以来およそ一世紀ぶりとなる、ヨーロッパ近海で戦われた英仏間の「艦隊同士の決戦」であった。

ハウの勝利に対して、庶民院は6月16日に感謝決議を採択したが、同日、「栄光の6月1日」海戦で戦死した海軍大佐ジェイムズ・モンタギューのモニュメント<sup>(15)</sup>建立を求める提案が、内務大臣ヘンリ・ダンダスより提出され、満場一致で可決された。さらに7月10日には、「栄光の6月1日」海戦で負った傷がもとで亡くなった海軍大佐ジョン・ハーヴィとジョン・ハットのモニュメント<sup>(16)</sup>建立の提案が、首相ウィリアム・ピットより提出され、これも満場一致で可決された。これらのモニュメントは、いずれもウェストミンスター・アビィに配置された。

この「栄光の6月1日」海戦の戦死者のモニュメントは、ピット与党によってウェストミンスター・アビィへの建立が提案されたことから、18世紀以来の議会の顕彰行為の伝統にしたがったものと言える。しかし、モニュメント建立には他の目的もあった。ピット政権がすすめた大陸への軍事介入は、ホイッグや急進派からつねに批判されたが、そうした批判に対して、フランス革命政府との戦争を正当化する必要があった。その場合、モニュメントは反革命戦争を正当化するためのプロパガンダとして期待されたのだ。<sup>(17)</sup> 現在進行している戦争は、イギリス

(15) *The Parliamentary Register*, Vol. 38, Commons, p. 397, 16 June 1794.

(16) *Ibid.*, Vol. 38, Commons, p. 470, 10 July 1794.

(17) たとえば、E.V. マクラウドは、当時ピット政権が対仏戦争に向けてのプロパガンダのために、パンフレット出版や執筆者への資金援助を行っていたことを指摘している。E.V. Macleod, *A War of Ideas: British attitudes to the wars against revolutionary France, 1792-1802*, Aldershot, 1998, p.55.



の伝統的な支配体制や国民を、フランス革命政府から守るために必要不可欠なものであり、戦死した士官はイギリスを守るために倒れたものとして記念・顕彰されたのである。一方、チャールズ・ジェームズ・フォックスら野党側の議員たちも議会では反革命戦争の遂行を批判し、さらにフランスとの戦争終結、帝国重視の「海洋派」<sup>ブルー・ウォーター</sup>戦略への転換をモニュメントによって主張しようとした。<sup>(18)</sup> その例が、次に見る海軍大佐ロバート・フォークナのモニュメントである。

フォークナのモニュメントをウェストミンスター・アビィに建立するために、1795年4月10日には独立派議員である「将軍」リチャード・スミスが動議を提出した。<sup>(19)</sup> この動議は14日にあらためて審議にかけられたが、これに対して与党は強く抵抗した。かれらはフォークナのようなケースに関して、過去に顕彰行為が行われた前例がないことを理由としてあげ、感謝決議やモニュメント、爵位のような議会が士官に与える栄誉の授与拡大をおそれ、その価値の低下を懸念したためであった。一方、フォックスをはじめとする野党は、報償や栄誉の授与に対するピット政権の不公平さを非難した。与党は、首相ピットの不在と、前例調査のための委員会設置を理由に審議の延期を提案したが、25対29で否決された。その結果、フォークナのモニュメント建立が可決されたのである。その後、セント・ポール大聖堂への配置変更が4月30日に庶民院で決議された。<sup>(21)</sup>

フォークナのモニュメント建立の動議を支持した議員には、ホイッグや彼の友人のほかに帝国に利害を持つ議員が含まれていた。<sup>(22)</sup> また、西インドで戦死した彼のモニュメントは、野党が主張する「海洋派」戦略の正当性を表象するには格好のものであり、ピット政権が顕彰する英雄に対抗するための、「野党の英雄」<sup>(23)</sup>のモニュメントであったと言える。セント・ポール大聖堂への配置変更は、1793年6月に決議された提督ロドニのモニュメントの前例にしたがったとも、セント・ポール大聖堂がロンドンだけではなく、イギリス帝国全体の主教座聖堂としての性格を持っていたためとも考えられる。あるいは、ピット政権の提案によるモニュメントがウェストミンスター・アビィに配置されるよう決議されていたので、それとの対抗を意図してのことであっただろう。

---

(18) フォックスらホイッグ党議員たちは、「栄光の6月1日」海戦ののち、その勝利によってフランスと和平を締結し、海軍力と帝国＝植民地での戦争を重視する「海洋派」戦略への転換を議会で主張していた。  
*The Parliamentary Register*, Vol. 38, Commons, pp. 395-396, 16 June 1794; Vol. 39, House of Lords, pp. 387-403, 13 June 1794.

(19) *Ibid.*, Vol. 41, Commons, p. 173, 10 April 1795.

(20) *Ibid.*, Vol. 41, Commons, pp. 185-193, 14 April 1795.

(21) *Ibid.*, Vol. 41, Commons, p. 225, 30 April 1795.

(22) フォックスやリチャード・プリンズリ・シェリダンのようなホイッグ党議員以外では、たとえば「帝国で最も富裕な議員」と呼ばれたサー・ウィリアム・パルトゥニや、フォークナの友人であるエドモンド・レヒミアが動議を支持した。R.G. Thorne (ed.), *The History of Parliament: The House of Commons, 1790-1820*, 1986, Vol. 4, pp. 399-400 (Lechmere); pp. 903-904 (Pulteney).

(23) フォークナが当時の国民、とりわけ野党側の人々のあいだで、どのように英雄視されたかについては、T. Jenks, 'Naval Engagements': *Patriotism, cultural politics, and the royal navy, 1793-1815* (unpublished Ph. D thesis, University of Toronto), 2001, Ch. 3をみよ。

1795年6月5日には、その一年前の1794年6月に西インド諸島グアドループで病死した陸軍少将トマス・ダンドスのモニュメントを、セント・ポール大聖堂に建立するための提案が、内務大臣ヘンリ・ダンドスより提出された。<sup>(24)</sup>この提案に対してフォックス野党からは何の異論もなく、満場一致で可決された。<sup>(25)</sup>このモニュメントは、フランス軍によってダンドスの墓が暴かれたうえに遺骸が晒されたという経緯から、フランスの残虐性を喧伝し、帝国における戦争もピットの推進する反革命戦争であると伝える性格を持っていた。さらに、さきに建立が決定された「野党の英雄」であるフォークナのモニュメントのもつ意図を相対化するねらいもあった。<sup>(26)</sup>

こうして、セント・ポール大聖堂に陸海軍の英雄のモニュメントが建立されるようになった。しかし、「栄光の6月1日」海戦の戦死者のモニュメントがウェストミンスター・アビィに建立され、ロンドン市長とフォックス野党が、セント・ポール大聖堂へのモニュメント建立のイニシアティヴを取ったことから分かるように、この段階では、セント・ポール大聖堂を「イギリスのパンテオン」として利用する意図を、イギリス政府が持っていたとは言い難い。ところで、1798年からモニュメント制作が開始されたが、1793年に決議された提督ロドニ、ヒースフィールド將軍のモニュメントは制作が見送られた。<sup>(27)</sup>さしあたり、現在進行中の戦争で死去した士官のみがコメモレイションの対象となったのである。

## 2 海軍感謝祭

1797年12月19日、セント・ポール大聖堂で海軍感謝祭が举行された。1794年の「栄光の6月1日」の海戦、1795年3月の提督ハザムによる海戦、同年6月の提督ブリッドポート（アレクザンダ・フッド）による海戦、1797年2月のサン・ヴィセンテ沖の海戦、同年10月のキャンパダウンの海戦と、これまでイギリスが勝利をおさめてきた海戦に参加した将兵たちが、ロンドンの20万人の群衆が見守るなか、敵艦隊から奪った軍旗を掲げてセント・ポール大聖堂までの道のりを行進し、大聖堂の中で再び軍旗を掲揚しその戦果を誇示したのである。行進にはテネリフェ島の戦いで右腕を失い、療養のためイングランドに帰還したホレイショ・ネルソンも加わっていた。感謝祭には国王ジョージ3世をはじめ王族、爵位貴族、庶民院議員など連合王国の要人が列席し、大聖堂での聖餐式はロンドン主教の手により執り行われた。12月

(24) *The Parliamentary Register*, Vol. 41, Commons, pp. 512-514, 5 June 1795.

(25) 以前、フォックス野党はダンドス將軍への感謝決議の動議を行ったが、ピット与党によって否決されていた。*The Parliamentary Register*, Vol. 38, Commons, p. 442, 20 June 1794.

(26) ダンドスのモニュメントの碑文には、その提案が議会で「満場一致 *Nemine Contradicente*」で可決されたことを記しているが、それはフォークナのモニュメントが、庶民院の審議では表決が割れ、国民の総意のもとで建立されたわけではないことを裏書きしている。

(27) 後述するが、提督ロドニのモニュメント制作のため、大蔵省と彫刻家 J.C.F. ロッシとの間に契約がかわされたのは、庶民院決議から18年後の1811年のことであった。ヒースフィールド將軍のモニュメントにいたっては、ナポレオン戦争が終結してもしばらくは制作が決定されなかった。

23日の『ロンドン・ガゼット』紙は海軍感謝祭の様態を伝えたのち、文章を次のように終えている。「国王陛下とイギリス政府へのロンドンとウェストミンスターの市民たちの熱意と忠誠、それから輝かしい戦果を挙げた陛下の艦隊への民衆たちの喜び、これらがこれまでに大きく示されたことは、儀礼の偉大さ壮麗さにふさわしいものであった<sup>(28)</sup>」。しかし、なぜこの時期に、このような大規模な感謝祭がおこなわれたのだろうか。

感謝祭が行われた1797年は、イギリスにとって最大の危機の年であった。すぐに撃退されたとはいえ、同年2月にはウェールズのフィッシュガードに1000名のフランス兵が上陸し、フランス軍侵攻の危機が高まった。一方、大陸においては、ナポレオン・ボナパルトを総司令官とするフランスのイタリア遠征軍がオーストリアに対して勝利をおさめ、同年10月にカンポ・フォルミア条約を同国との間で締結した。これによってウィリアム・ピットが主導してきた対仏大同盟は解体し、イギリスは国際的に孤立した。イギリスの第一の防衛力である王立海軍は、フランスのイギリス侵攻の危機に対して、海上でフランス艦隊を撃退することでイギリスの伝統的な秩序を保護し、国民の安全を保障することを強く要求されていたのである。ところが、1797年4月にはスピットヘッド沖で、ついで6月にはノア沖で停泊中の艦隊において水兵の反乱が勃発した。のちに海軍大反乱と呼ばれる事件であるが、その反乱首謀者の多くは、急進派の政治クラブに出入りし、フランス革命思想や急進主義思想の影響下にあったと言われている<sup>(29)</sup>。このことは、ウィリアム・ピットをはじめとするイギリス政府首脳を驚愕させた。

イギリスとフランス革命政府との戦争は、それ以前の対仏戦争とは異なり、近代におけるイデオロギー抗争としての側面を持っていた。したがって、フランス革命や急進的な思想の波及が、伝統的な支配体制や秩序を転覆させることを何よりも恐れた支配階層にとって、海軍大反乱の勃発は、海軍力に対する国民の信頼を揺るがし、ひいては自らの地位を崩壊させかねないものと考えられたのである<sup>(30)</sup>。その意味では、今後の対仏戦争を続行していくうえでも、また国民の安全を保障していくうえでも、海軍の持つ公的イメージ、あるいは国民の信頼を回復することが、イギリス政府にとって必要不可欠のこととなった。それは、過去の海軍の勝利や栄光をこれまで以上に大きく喧伝し、記念・顕彰する方向で現れたのである。それが典型的に見られたのが、本章の冒頭で述べた海軍感謝祭である。その挙行に関して、1797年10月31日の『タ

---

(28) *The London Gazette*, 23 Dec. 1797. また海軍感謝祭の様態に関しては、*The Times*, 13 Dec. 1797; 18 Dec. 1797; 20 Dec. 1797; *Annual Register* (1797), pp.80-83.

(29) 海軍大反乱については、以下を参照。J. Dugan, *The Great Mutiny*, New York, 1967; E.P. Thompson, *The Making of the English Working Class*, New York, 1964, p.148, pp.167-168 (市橋秀夫、芳賀健一訳『イングランド労働者階級の形成』青弓社、2003年、172-173頁、195-198頁)。川北稔『民衆の大英帝国 近世イギリス社会とアメリカ移民』岩波書店、1990年、159-161頁。

(30) ノア沖の海軍反乱の報を受けたウィリアム・ピットは、庶民院で次のように発言している。「もし、国制の原則やこの国の誇りに対する敵が存在したとすれば、かれらはわが国の安全を支える海軍の将兵たちを唆し、弱体化させることを望んでいるだろう。それは国民にも海軍そのものにも等しく致命的なことだ」。 *The Parliamentary Register (the session of the 18th Parliament of Great Britain)*, Vol. 2, Commons, pp. 688-689, 6 June 1797.



イムズ』紙は次のように伝えている。

[海軍感謝祭] 国王の考えにもとづくものである。国王陛下自らがセント・ポール大聖堂を訪問するという今回の決定は、オランダ艦隊に対するわが艦隊の輝かしい勝利のためではなく、ヨーロッパの三大海軍国に対する3つの大勝利を記念するために行われるのである。3つの勝利とは、ハウ卿、セント・ヴィンセント卿、ダンカン卿の功績によって得られたものである。記憶すべき1794年6月1日にフランス人から奪った軍旗、1797年2月14日にスペイン人から奪った軍旗、今月11日にオランダ人から奪った軍旗、この敵国から奪った3つの軍旗はセント・ポール大聖堂へ運ばれ、国民への戦利品として飾られたのであった。神の御加護によって、わが艦隊は勝利に導かれ、[フランスの] 侵攻の危機からわが国は解放されたが、そのことを神にあらためて感謝して、決定的な勝利を厳かに祝うために、信仰深き国王陛下は指図されているのだ。<sup>(31)</sup>

中世以来セント・ポール大聖堂は、敵国から奪った軍旗を戦利品として飾るというイギリスの軍事壮挙を誇示する場であり、勝利を記念・顕彰するための感謝祭も挙行されていた。1588年のアルマダ海戦の勝利への感謝祭や、スペイン継承戦争期のマールバラ公の戦勝への感謝祭が前例としてあげられよう。こうしたセント・ポール大聖堂の持つ「勝利の空間」としての側面にあらためて注目したピット政権によって、1797年の海軍感謝祭は計画されていた。<sup>(32)</sup> そのねらいは2つあったと考えられる。ひとつは、敵国から奪った軍旗を掲げてロンドン市内を行進し、セント・ポール大聖堂で再び掲揚することで、これまでのヨーロッパ三大海軍国に対するイギリスの勝利の記憶を喚起し、イギリスの栄光とそれをもたらした強大な海軍力を国民に強くアピールすることであった。次に、海軍感謝祭では水兵たちを250名行進させることによって、一度は反旗を翻した水兵もあらためて国王に忠誠を誓い、海軍内の秩序や規律が回復したことを宣伝しようとした。それは、海軍大反乱によって大きく損なわれた王立海軍に対するイギリス国民の信頼とその公的イメージを、すみやかに再構築することを目的としたものであった。<sup>(33)</sup>

フランスとの戦争が依然として続き、平和にはほど遠い状態で、海軍感謝祭を挙行するという政府の決定には、たしかに批判もあった。ロイヤル・アカデミー会員の画家、ジョゼフ・

(31) *The Times*, 31 Oct. 1797.

(32) キャンパダウン海戦の直後に、外務大臣グレンヴィル卿は海軍大臣スペンサ伯にあてた書簡のなかで、海軍感謝祭の実施を提案している。J.S. Corbett (ed.), *Private Papers of George, Second Earl Spencer: First Lord of the Admiralty 1794-1801*, Vol. 2, 1914, pp.195-196, 13 Oct. 1797.

(33) リンダ・コリーは『イギリス国民の誕生』のなかで、1797年の海軍感謝祭を国王崇拜や王室の公式行事との関係で考察し、感謝祭の開催を決定したのは国王ジョージ3世であったと述べているが、本論で述べた経緯と感謝祭の目的からも、彼女の解釈はミス・リーディングであると言えよう。Colley, *Britons*, pp. 215-216 (川北訳、225頁).

ファリントン、その日記のなかで、彼の友人である海軍大将サー・アラン・ガードナ<sup>(34)</sup>の言葉を記している。「サー・アランは、セント・ポール大聖堂での感謝祭は賢明なやり方ではないと考えている——国王は嘲笑われるかもしれない。また、彼はこうも言っていた。結局、海軍の数々の勝利は、和平を進めるうえで決定的なものを何ひとつもたらさなかった<sup>(35)</sup>」。急進派の新聞である『モーニング・クロニクル』紙は、もっとあからさまに、海軍感謝祭を「フランス化した茶番劇」と非難した<sup>(36)</sup>。しかし、セント・ポール大聖堂を「勝利の空間」として活用することで、イギリスの勝利の記憶を動員しようとする試みは、この後も繰り返し行われることになる。それは、イギリス政府による陸海軍士官のモニュメント建立にも反映された。1799年8月に死去した提督リチャード・ハウのモニュメント【図3】

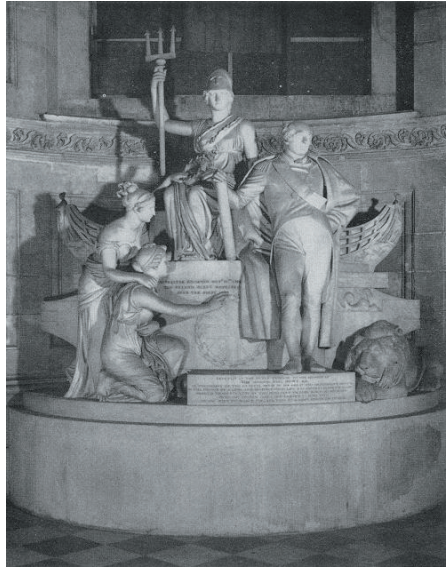


図3  
ジョン・フラクスマン (1755-1826)  
海軍元帥リチャード・ハウ卿のモニュメント  
セント・ポール大聖堂

が、その例としてあげられよう。1799年10月3日の庶民院で、セント・ポール大聖堂へのハウのモニュメント建立が満場一致で決議されたが、その審議において戦時国務大臣ヘンリ・ダundasは次のように発言している。

わたしは〔提督ハウのモニュメントが〕ウェストミンスター・アビイよりもセント・ポール大聖堂に備えられるほうが望ましいと考えています。なぜなら、1794年6月1日にハウによって勝ち取られた軍旗が掲げられたのは、セント・ポール大聖堂であったという神々しい記憶がハウの勝利の記憶にともなっていることを、彼のモニュメントが伝えようとしているからです<sup>(37)</sup>。

提督ハウは「栄光の6月1日」海戦の勝者であり、海軍大反乱のさいには、スピットヘッ

(34) サー・アラン・ガードナは、1790年1月から1795年3月まで海軍委員をつとめ、「栄光の6月1日」海戦で得た名声から、1796年6月の庶民院総選挙では、政府側の候補者としてイングランド最大の選挙区であるウェストミンスター選挙区に出馬し、ホイッグ党の党首フォックスとならんで当選していた。

(35) K. Garlick & A. Macintye (eds.), *The Diary of Joseph Farington*, Vol. 3, New Haven, 1979, p.939 (10 Dec. 1797).

(36) *Anti-Jacobin, or weekly examiner*, 11 Dec. 1797からの引用。『モーニング・クロニクル』紙のこの見解に対して、『アンティ・ジャコバン』紙は海軍感謝祭を擁護し、それがいかにイギリス的な儀礼であるかについて論じたうえで『モーニング・クロニクル』紙を批判している。

(37) *The Parliamentary Register (the session of the 18th Parliament of Great Britain)*, Vol. 10, Commons, pp. 94-95, 3 Oct. 1799.



図4

サー・リチャード・ウェストマコット (1775-1856)  
陸軍中将サー・レイフ・アバークロンビのモニュメント  
セント・ポール大聖堂

ド沖の反乱の沈静化に成功した人物である。モニュメントを建立することで国家への貢献を感謝し、記念・顕彰することは、彼によってイギリスの支配体制や秩序が救われたと考えるピット政権にすれば当然のことであった。1802年のアミアン条約によって成立したつかの間の平和の時期に、ハウのモニュメントは、ナイルの海戦で戦死した海軍大佐ウェストコット、コペンハーゲン沖の海戦で戦死した海軍大佐モッセとリオウのモニュメントとあわせて制作が決定され、1803年4月26日に大蔵省「審査委員会」と彫刻家との間に契約がとりかわされた<sup>(38)</sup>。ハウのモニュメントの制作予算には、最高額の6300ポンドが割りあてられた。

このとき、イギリスの「エジプト遠征」の総司令官で、アレクサンドリア付近で行われたフランス軍との戦いで戦死した陸軍中将サー・レイフ・アバークロンビのモニュメント【図4】建立も決定された。彼のモニュメントにも6300ポンドの制作予算が割りあてられたが、アバークロンビのモニュメントとは、対仏戦争におけるスコットランド人の功績を表象し、ナポレオンのエジプト遠征の失敗を喧伝するためのものであった<sup>(39)</sup>。

このとき、イギリスの「エジプト遠征」の総司令官で、アレクサンドリア付近で行われたフランス軍との戦いで戦死した陸軍中将サー・レイフ・アバークロンビのモニュメント【図4】建立も決定された。彼のモニュメントにも6300ポンドの制作予算が割りあてられたが、アバークロンビのモニュメントとは、対仏戦争におけるスコットランド人の功績を表象し、ナポレオンのエジプト遠征の失敗を喧伝するためのものであった<sup>(39)</sup>。

### 3 ホレイショ・ネルソンの葬儀

英雄や著名人の葬儀をウェストミンスター・アビィではなく、セント・ポール大聖堂で行うことに関しては、すでに18世紀後半から議論が行われてきた。1778年5月にチャタム伯ウィリアム・ピットが死去したさいには、政府予算によって葬儀をウェストミンスター・アビィで行い、そのモニュメントをウェストミンスター・アビィに建立することが、庶民院で可決された<sup>(40)</sup>。

(38) セント・ポール大聖堂のモニュメントは、当初ロイヤル・アカデミーにその制作が委託されていた。しかし、アカデミーがモニュメント建立を独占しているという非難から、のち1802年7月に大蔵省内に「審査委員会 (The Committee of Taste)」が設置され、同委員会がモニュメントの様式、聖堂内の配置、予算を選択することとなった。議長をつとめたのは、大蔵省書記官チャールズ・ロングであり、彼をあわせて7名の委員から構成された。その多くは美術蒐集家、鑑定家である。

(39) アバークロンビとコロナの戦い (1809年) で戦死した陸軍中将サー・ジョン・ムーアは、ともにスコットランド出身の士官である。ウェリントンが半島戦争で名声を獲得するまでは、かれら2人が陸軍の英雄として知られていた。ムーアのモニュメントもセント・ポール大聖堂に建立されている。

(40) *Cobbett's Parliamentary History of England : from the Norman conquest, in 1066 to the year 1803*, Vol. 29, Commons, cols. 1224-1225, 11 May 1778.

その後、チャタム伯の葬儀に関して、ロンドン・シティより請願書が庶民院に提出された。<sup>(41)</sup>ロンドン市長、ロンドン市参事会員、ロンドン市議会の連名によるその請願書には、チャタム伯の葬儀をセント・ポール大聖堂で挙行したのち埋葬することを希望する旨が記されていた。それは、チャタム伯の生前の活動と助言とが、商業の保護と発展に多大に貢献したことに對して、「イギリス帝国における第一の商業都市であるロンドン・シティ」が、感謝と尊敬の特別の証しを示すためであった。しかし、請願に對する議員たちの意見が2つに割れ、すでにウェストミンスター・アビィで葬儀の準備が進んでいたことから、シティの請願書は棚上げされた。したがって、ホレイショ・ネルソンの葬儀は、セント・ポール大聖堂の再建後はじめての国民的英雄の葬儀となった。

1805年10月21日、イギリス地中海艦隊は、スペインのトラファルガル沖でフランス・スペイン連合艦隊と交戦し、司令官ネルソンを失いながらも敵艦隊を全滅させた。その報せは、トラファルガル海戦の次席の司令官、提督カスバート・コリンウッドの書簡によってイギリス本国に11月5日に伝えられた。<sup>(42)</sup>国王ジョージ3世の意向から、ネルソンの死は国葬をもって弔われることが決定されたが、葬儀の実質的な責任者には、首相ウィリアム・ピットとホークスベリ男爵ロバート・バンクス・ジェンキンソン（のちの首相リヴァプール伯）の2名があたることになった。とくに、ホークスベリ男爵が中心的役割を果たすこととなった。ネルソンの葬儀がどこで行われるかに関して、同年11月10日にホークスベリ男爵はジョージ3世にあてた書簡の中で次のように述べている。

近年、ウェストミンスター・アビィは多くのモニュメントによって大変混み合っておりますし、過去の海軍の勝利において、国王陛下の敵から奪った軍旗はセント・ポール大聖堂に飾るのがふさわしいと考えられてきました。わが国に大きく貢献した陸海軍士官の記憶を後世に残すべく建立されますモニュメントが、セント・ポール大聖堂に設置されるのが最もふさわしいと考えられておりますと同様に、陛下にはセント・ポール大聖堂こそ、[ネルソンの] 葬儀に最もふさわしい場所と考えていただきたく存じます。<sup>(43)</sup>

また、ホークスベリ男爵からの書簡を受け取った直後に、ジョージ3世はウィリアム・ピットにあてた書簡の中で、勝利の輝かしい記憶を呼び起こすために、軍事的な栄誉をもってネルソンをセント・ポール大聖堂に埋葬するよう伝えていた。<sup>(44)</sup>

トラファルガル海戦ののち、ネルソンの遺体は没薬と樟脳を混ぜたブランディを満たした樽の中に保存され、旗艦ヴィクトリ号によってイギリスに運ばれた。12月5日にポーツマス

---

(41) *Ibid.*, Vol. 29, Commons, cols. 1228-1233, 21 May 1778.

(42) *The Times*, 7 Nov. 1805.

(43) A. Yarrington, *The Commemoration of the Hero*, pp.79-80 からの引用。

(44) B. Dobrée (ed.), *The Letters of King George III*, 1968, p.265 (11 Nov. 1805, King George III to W. Pitt).



に到着したが、その間も葬儀の準備は進行した。葬儀の準備・演出は、ロイヤル・アカデミー会員であり、その総裁に選出されたばかりの建築家ジェイムズ・ワイアットが、海軍感謝祭のときと同様に担当した。ネルソンの葬儀では、その式次第、参列者と葬列の順番は紋章院によって決定されたが、当時、紋章院総裁であったノーフォーク公チャールズ・ハワード、ガーター紋章官サー・アイザック・ヒアードらがネルソンの葬儀においてその任にあたった。



図5 ネルソンの霊柩車

また、これまでのイギリスの軍事葬儀と同様に、ネルソンの葬儀においても霊柩車が使用された【図5】。その霊柩車は戦列艦を模したもので、船首には「名声」を象徴する女神が象られ、船尾は戦艦ヴィクトリ号を模して作られた。それはトラファルガルの海戦の記憶を喚起するためであった。さらに霊柩車の上部をささえる柱はヤシの木が、上部の屋根にあたる箇所には「栄光はそれに値する人にこそふさわしい (Palmam qui Meruit Ferat)」と刻まれ、シュロの葉が象

られた。それはナイルの海戦の記憶を喚起するためであった。ネルソンの棺そのものは、ナイルの海戦時のフランス艦隊旗艦オリアン号のメイン・マストより作られていた。つまり、霊柩車そのものが、ネルソンのモニュメントであったのだ。このような霊柩車は、46年後のウェリントン公の葬儀のさいにも使用されている。

しかし、伝統的な軍事葬儀の作法にしたがいつつも、ネルソンの葬儀は、イギリス国民の愛国心を鼓舞し戦意高揚に効果を与えるために、1797年の海軍感謝祭と同様の「愛国的な見世物」としての要素を多分にもっていた。喪主には海軍元帥サー・ピーター・パーカーが任命されたこと、それから、水兵が葬儀に参列したという点に、それを見ることができる<sup>(45)</sup>。

葬儀にあたっては喪主を決定しなければならなかったが、通常は故人の遺族か、相続人が喪主を務めるのが慣例であった。ところが、ネルソンの葬儀の場合では、その遺族で爵位相続者である彼の兄が喪主を務めるのは問題外であった。11月13日の『タイムズ』紙が伝えるところでは、王太子ジョージ（のちのジョージ4世）とクラレンス公ウィリアム・ヘンリ（のちのウィリアム4世）がそれぞれ喪主として名乗りを挙げていた<sup>(46)</sup>。しかし、これには国王ジョージ3世が強く反対した。君主が臣下の葬儀に参列したことがないという前例から、ジョージ3世

(45) 次の2つの段落は、T. Jenks, 'Contesting the Hero: The Funeral of Admiral Lord Nelson', *Journal of British Studies*, 39, 2000, pp.422-453 で示された見解に依拠している。しかし、ネルソンの葬儀をイギリス国民のさまざまな愛国心が競合する場であったと論じるジェンクスの主張に、筆者は全面的にしたがったわけではない。

(46) *The Times*, 13 Nov. 1805; A. Aspinall (ed.), *The Correspondence of George, Prince of Wales, 1770-1812*, Vol.5, 1968, p.276 (2103: Lord Nelson to Colonel Fitzroy, 18 Nov. 1805).



本人はセント・ジェイムズ宮殿から葬列を見送るにとどまり、王太子とクラレンス公は、王族としてではなく、連合王国下の爵位貴族としてネルソンの葬儀に参列することになった<sup>(47)</sup>。最終的に喪主に選ばれたのは、海軍最高齢の将官である海軍元帥サー・ピーター・パーカーであった<sup>(48)</sup>。彼は若き日のネルソンの庇護者のひとりであり、ネルソンとは縁の深い人物と言えた。さらに喪主のすぐそばに控える喪主補佐たちも、遺族ではなくウィリアム・レイドストック、サミュエル・フッドら海軍大将でかためられた。このことは、ネルソンの勇敢さ、功績、愛国心の後継者としての王立海軍とその将兵たちというイメージを葬儀で表象させることとなった。

また、紋章院主宰の葬儀では、故人が亡くなったときの年齢と同数の「貧者」を葬儀に参列させることとなっていた。ネルソンの葬儀では「貧者」の代わりに、48人のグリニッジ・ホスピタルの年金受給者と48人のヴィクトリ号の水兵が参列した。前者は片目片腕を失ったネルソンの、自己の身体を犠牲にした愛国心を連想させるものとして採用された。後者のヴィクトリ号の水兵は、トラファルガル海戦に参加し、その栄光を伝える愛国的なシンボルとして機能するものであった。さらに、翌年1月9日のセント・ポール大聖堂におけるネルソンの葬儀では、その最後の、ネルソンの将旗を棺の上にのせようとした時に、その旗を千々に引き裂いて形見として持ち去るというきわめて劇的な行動をとることによって、ヴィクトリ号の水兵たちは人びとの記憶に刻み込まれたのである。

翌1806年1月5日から7日にかけて、グリニッジ・ホスピタルのペインティド・チェインバでネルソンの正装安置が行われた。ネルソンの棺を一目見ようと訪問した人びとの数は3万人以上にのぼった。翌8日にはネルソンの棺は将官艇に乗せられ、テムズ川を遡って海軍省まで運ばれた。9日にはホワイトホールからセント・ポール大聖堂まで葬送行進が進むなか、ネルソンの遺体は霊柩車で運ばれ、ドーム中心部の地下という、セント・ポール大聖堂のなかでも最も名誉ある場所に埋葬され<sup>(49)</sup>た。ネルソンの墓棺の台座は大理石製で、16世紀に国王ヘンリ8世のためにトマス・ウルジ枢機卿の支出で制作され、王太子ジョージから提供されたものである【図6】。

従来から、セント・ポール大聖堂では海軍感謝祭が举行され、陸海軍の英雄のモニュメントが建立されてきたことを考えると、ネルソンの葬儀を大聖堂で行うことはほとんど自明であったといえるかもしれない。しかし、ネルソンの埋葬は、イギ



図6 ネルソンの墓棺

(47) *The Times*, 27 Dec. 1805.

(48) *The Times*, 23 Dec. 1805.

(49) ネルソンの葬儀の様相に関しては、以下を参照。*The Times*, 10 Jan. 1806; *The London Gazette*, 14 Jan. 1806; *Annual Register* (1806), pp.354-360; N.H. Nicolas (ed.), *The Dispatches and Letters of Lord Nelson*, Vol.7, 1846, pp.399-421(Appendix: Lord Nelson's Funeral).

リスの栄光の記憶が刻まれてきたセント・ポール大聖堂に、国民的英雄であるネルソンの墓所という性格も与えることとなった。それ以後のセント・ポール大聖堂は、その性格を強化する方向でモニュメントが建立されることになる。ネルソンの死から5年後の1810年には、彼の友人であり、トラファルガル海戦では次席の司令官であったカスバート・コリンウッドが、地中海からイングランドへ帰国する途上病死した。その遺体はセント・ポール大聖堂に埋葬されたが、彼がネルソンに続いて大聖堂に埋葬された2人目の英雄となった。コリンウッドのモニュメント建立の提案は、1810年6月8日の庶民院の審議で決議されたが、彼のモニュメント制作を选考するさいに、1793年の庶民院決議後、まだ制作が行われていなかった提督ロドニのモニュメントもあわせて选考され、1811年9月に契約がかわされた<sup>(51)</sup>。それは、海軍の勝利と英雄だけをあらためて顕彰することで、ネルソンの墓所としての大聖堂の性格を強めるためであった。そのためか、その後建立が決議された陸軍士官のモニュメントは、ネルソンやハウなどの海軍士官のモニュメントと比べると制作予算は低額に抑えられ、聖堂内の配置も考慮されることはなかった<sup>(52)</sup>。

#### おわりに

フランス革命・ナポレオン戦争は、イギリス国民がはじめて経験した「総力戦」<sup>(53)</sup>であった。戦争の規模、期間、地理的範囲、いずれをとってもそれ以前の対仏戦争をはるかにしのいでいたが、それ以上に国民にとって深刻であったのが、フランスによるイギリス侵攻の可能性が、過去のどの戦争と比べても高かったことである。そのためイギリス政府は、フランス、ドイツ、ロシアのようなヨーロッパ諸国と同様に、国民を兵士として大衆動員——「義勇兵運動 Volunteer Movement」<sup>(54)</sup>と呼ばれている——をせざるを得なかった。さらに、他にも大きな影響をこの戦争が与えたことは想像に難くない。それは連合王国の統合を強め（1801年の「グレート・ブリテンおよびアイルランド連合王国」の成立）、イングランドだけではなく、スコッ

(50) *Hansard's Parliamentary Debates*, 1st Series, Vol. 17, Commons, cols. 511-513, 8 June 1810.

(51) *Accounts and Papers (British Parliamentary Papers, 1842[559] XXVI, p.505).*

(52) ワーテルローの戦いで戦死した陸軍中将ピクトンと陸軍少将ボンソンのモニュメントは、例外的に予算も聖堂内の配置も考慮されたが、それでも一体あたり3,150ポンドと、位階が下である海軍大佐のモニュメントよりも低額であった。外務大臣カースルレイ子爵は、1815年6月に陸軍少将以上の位階を持つすべての戦死した士官に対して、モニュメントを建立する慣例を定めることを提案している (*Hansard's Parliamentary Debates*, 1st Series, Vol. 31, Commons, col. 913, 21 June 1815)。しかしナポレオン戦争後、このような報償制度のごときモニュメント建立は、戦死した陸軍士官に対して行われることはなかった。

(53) J.E. Cookson, *The British Armed Nation, 1793-1815*, Oxford, 1997, p.247. また、C.J. エスデイルは、第1次世界大戦前のイギリス人にとって、「大戦 the Great War」とフランス革命・ナポレオン戦争は同義であったと述べている。C.J. Esdaile, *The Wars of Napoleon*, 1995, p.143.

(54) 義勇兵運動に関しては、以下を参照。L. Colley, 'The Reach of the State, the Appeal of the Nation: Mass arming and political culture in the Napoleonic Wars', in L. Stone (ed.) *An Imperial State at War: Britain from 1689-1815*, 1994, pp.165-184; Cookson, *op.cit.*; A. Gee, *The British Volunteer Movement 1794-1814*, Oxford, 2003.

トランド、アイルランドのようなケルト周縁の地域までもが、これまで以上に戦争と深く関わるようになった。<sup>(55)</sup> 逆を言えば、地域や階層の別を越えて国民を戦争に動員しなければ、この戦争でイギリスはナポレオンに対し勝利をおさめることはできなかった。「イギリスのパンテオン」へのセント・ポール大聖堂の再構築は、イギリス国民に与えたナポレオン戦争の影響を少なからず物語っている。

セント・ポール大聖堂に建立された陸海軍士官のモニュメントは、フランス革命・ナポレオン戦争において、フランスの脅威から既存の支配体制や秩序が脅かされたことに対して、イギリスの支配層の国家への貢献を表象し、かれらの存在意義を再確認させる性格をもっていた。その限りでは、リンダ・コリーのいう「排他的な英雄崇拜」<sup>(56)</sup>と呼びうるものであっただろう。しかし、軍事的栄光の記憶が、支配層にのみ共有されたわけではない。海軍感謝祭やネルソンの葬儀では、民衆的要素としての水兵が参列し、重要な役割をはたしていた。また、そうした儀礼が、「勝利の空間」であるセント・ポール大聖堂で行われることによって、軍事的栄光の記憶は広く国民が共有するものとなった。モニュメントと儀礼は、たがいに影響しあい、セント・ポール大聖堂を国民のシンボルへと高めたと言える。それゆえに、「イギリスのパンテオン」となったセント・ポール大聖堂は、軍事的栄光や英雄たちの記憶を動員する場として、この後も20世紀後半まで利用され続けた。

1852年11月18日、ナポレオンを破ったワーテルローの戦いの英雄、ウェリントン公アーサー・ウェルズリの葬儀がセント・ポール大聖堂で挙行された。<sup>(57)</sup> その葬儀は、46年前のネルソンの葬儀の前例にしたがったものであったが、<sup>(58)</sup> 「パクス・ブリタニカ」による繁栄を謳歌していたイギリスの強大さを反映して、はるかに大規模におこなわれた。しかしそれは、当時イギリスではナポレオンの脅威が再び高まったためでもあった。1840年12月のナポレオンの「遺骸の帰還」<sup>(59)</sup>、1851年12月のルイ・ナポレオンのクー・デタと翌年の皇帝即位と、フランスではナポレオンの記憶がよびおこされ、一方イギリスでは、1840年代から50年代にかけて、フ

---

(55) この時代のスコットランドの戦争参加と国民意識の変容に関しては、次の研究が参考となる。J.E. Cookson, 'The Napoleonic Wars, Military Scotland and Tory Highlandism in the Early Nineteenth Century', *Scottish Historical Review*, 78 (1), 1999, pp.60-75.

(56) Colley, *Britons*, p. 180 (川北訳, 190頁). J.E. コックソンも、その著書『武装したイギリス国民』のなかで、セント・ポール大聖堂のモニュメントとは陸海軍士官への報償制度にすぎず、ナショナリスティックな当時の民衆よりも、軍人階級に向けてのものであったと述べている。Cookson, *The British Armed Nation*, p.224.

(57) ウェリントン公の葬儀に関しては、M. Greenhalgh, 'The Funeral of the Duke of Wellington', *Apollo*, 1973, pp.220-226、君塚直隆「ウェリントン公爵の葬儀とイギリス政治」『西洋史学』203号、2002年、59-72頁を参照。

(58) たとえば、ネルソンの葬儀ではグリニッジ・ホスピタルの48人の年金受給者が参列したことはすでに述べたが、ウェリントン公の葬儀では、「貧者」の代わりにチェルン廃兵病院の83人の年金受給者が参列している。

(59) ナポレオンの「遺骸の帰還」とその背景に関しては、ジャン・チュラール(杉本淑彦訳)「遺骸の帰還 ナポレオン伝説とアンヴァリッド」ピエール・ノラ編(谷川稔監訳)『記憶の場 フランス国民意識の文化＝社会史 第3巻：模索』岩波書店、2003年、101-136頁、杉本淑彦『ナポレオン伝説とパリ 記憶史への挑戦』山川出版社、2002年を参照。

ランスのイギリス侵攻の可能性が議論されていた。その脅威に対抗するために、セント・ポール大聖堂では、ナポレオン戦争におけるイギリスの勝利と栄光の記憶が劇的に想起されたのである。

ウェリントン公の埋葬後も、帝国における戦いで死去した士官や、第1次・第2次世界大戦の陸海軍の元帥をはじめとする英雄たちがセント・ポール大聖堂に埋葬され、あるいはモニュメントが建立され続けた。<sup>(60)</sup>かれらのモニュメントは、イギリスが築き上げた帝国の偉大さや栄光を伝えるものであった。1965年のサー・ウィンストン・チャーチルの葬儀は、政治家でありながら、ウェストミンスター・アビィではなくセント・ポール大聖堂で挙行されたが、これまでの「イギリスのパンテオン」としての大聖堂の歴史を考えると、イギリスの栄光と帝国の終焉を告げるきわめて象徴的なできごとであった。

---

(60) ウェリントン公の埋葬後は、陸海軍士官のモニュメントはセント・ポール大聖堂地上部ではなく、地下祭室のネルソンやウェリントン公の棺を取り囲むようにして配置されるのが一般的となった。モニュメントの様式もかつてのような立像ではなく、事績を刻んだタブレットが多くを占めている。こうしたモニュメントのなかで、海軍士官のものに関しては次の文献をみよ。D. Saunders, *Britain's Maritime Memorials & Mementoes*, 1996. また、グリニッジ国立海洋博物館のホームページ内の Maritime Memorial も参考となる (URL=<http://www.nmm.ac.uk/memorials/Index.cfm>)。